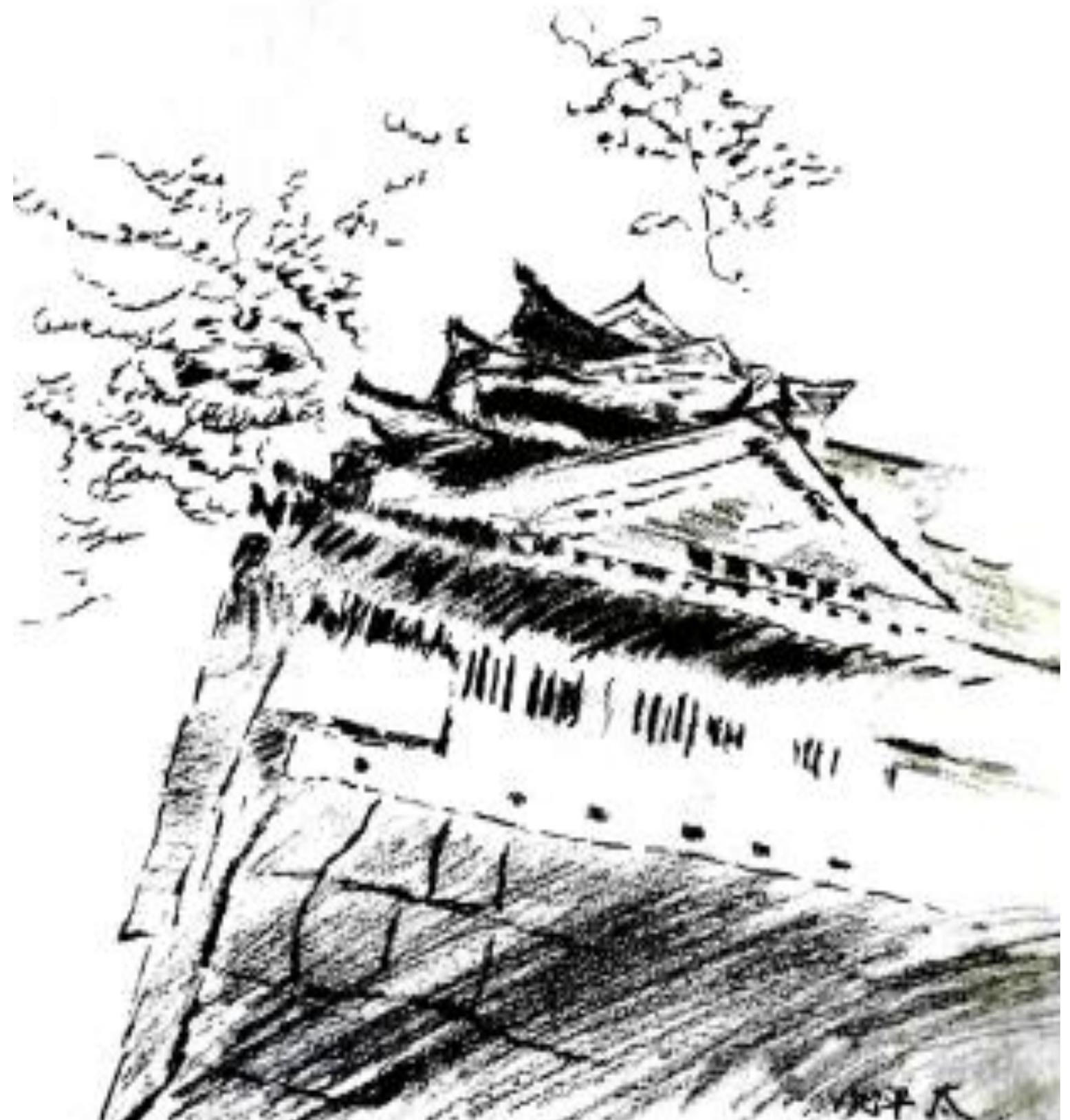


閣守天柳川

2026年02月号



第33回例会 2025年1月15日(木) 投句締切分

お題 「ゼロ」

秋田あかり 選

ゼロの数自分に縁はないと知る
この夢を捨てたら何も無い私
貯金ゼロ風に吹かれてマイペース
右上の小さい千を見落とした
わたくしをお返しますただの空
新しい自分になるうゼロにする
物価高ゼロのト桁増えている
ゼロからのスタートでした孫五人
ゼロからの夫婦を重ねダイヤ婚
無限へと伸びしろ秘めたゼロがある
〇号店の「ほつず」シンクス覆し
父の文庫に愛着のある『零の焦点』

(五客)

濱脇蓬生
春田敏晴
林ともこ
浜脇蓬生
真鍋心平太
直子
堀内きみ子
林ともこ
山野寿之
小西博稀
波部珀兎
波部珀兎
松島きよみ
松谷由夏
秋山加代子

(三才)

佳2 ゼロからの一步未知への無限大
佳1 新年のスタートを切る初日の出
人 今日からは仕切り直しと誓う朝
地 旅人よ〇番線の風になる
天 いいですね可能性あるゼロが好き
軸 視界ゼロ北窓だけの四畳半
井澤壽峰
松谷由夏
青空
浜知子
信子
秋田あかり

(選評)

人の句
しきり直しする度 新しい自分になれます。
何歳になっても自分らしく生きたいと思います。
地の句
〇番線の風なんて ようやく自由の鳥に
なられたのでしょうかね。
天の句
ゼロを描くと まあるい球根のようです。
しつかり明日を見つめています。私も好きです。

お題 「手袋」

佐野正邦 選

とつときの皮手袋にカビが生え

手袋を捨ててランナーさらに前

柵上の片手袋の悲しさよ

指先の出る手袋で夢つかむ

軍手はめ雑草まみれの庭掃除

夜鍋して紡ぐ手袋母の愛

手袋のまま指切りそれも愛

寂しさを隠す手袋持っている

見つからない片方寂しい右手袋

汚れても軍手まぶしい畑仕事

血と汗の滲む軍手にある矜持

ひびだらけ手袋を編む母の手は

(五客)

佳5 手袋を脱いで温い手伸直り

佳4 血の滲む作業を終えた軍手干す

佳3 手袋の穴から貧が忍び寄る

秋田あかり

小西博稀

蔵内歳重

平川柳

東尾由子

井澤壽峰

久世高鷲

直子

波部珀兔

小西博稀

井澤壽峰

東尾由子

堀内きみ子

久世高鷲

秋山加代子

佳2 オムツ替えゴム手袋の介護の日

佳1 手袋の右手ばかりをなくす癖

(三才)

人 雪道に右手袋が落ちている

地 手袋を投げた相手に送る塩

天 片方は現地に置いて旅の空

軸 皮手より君に似合いと軍手言う

松谷由夏

山野寿之

林ともこ

秋山加代子

浜脇蓬生

佐野正邦

(選評)

人の句

大雪だったのか？

道を確保するために奮闘した手袋。

大丈夫です。あなたの安全守ります。

一安心した右の手袋ですね。

地の句

右手袋を投げました。宣戦布告です。

時が経ち、落ち着きを取り戻し、エールを送りました。

心の広い作者です。

戦わずにきつと伸直りできますよ。

天の句

又来るよ、また会おう。誰の所に置いてきたのかな、右の手袋。恋人、家族、恋敵、よきライバルでしょうか。

きつとすべてうまくいくと思います。

お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

- 高い支持維新までもが便乗し
年玉も電子マネーに変わるかも
初春に心機一転初投句
癌告知ガクガクの後腹座る
亡夫の干支己が持ち去った五十肩
日常が静かに戻る年の明け
振り向けば紆余曲折のダイヤ婚
人の愛時の流れに去ってゆく
盤上でウクライナには歩が悪い
いつも関心！目礼をする小学生
いい格好すれば待ってる後始末
待ってみる次の電車でくる奇跡
「あほう」の地末だ捨てずに老いの嵩
続けたい話などない長電話
- 加山勝久
浜脇蓬生
井澤壽峰
松谷由夏
三枝なな
秋山加代子
山野寿之
東尾由子
久世高鷲
波部珀兔
佐野正邦
浜知子
小西博稀
信子
- 武智三成
蔵内歳重
青空
秋山加代子

(五客)

- 佳1 革命を信じた軍鶏の血のとさか
平川柳
- (三才)
- 人 ホバリングばかりで終わるあかたれ 林ともこ
地 向き合うと裏切ってくる魂よ 直子
天 美しく立てただろうか月を見る 直子
軸 年賀状減って寂しいそれもよし 真鍋心平太
- (選評)
- 人の句
現代人の痛いところを突く一句。
決断を先送りにして、時間切れ・諦めの境地に至る。
「あかたれ」は自嘲で矛先が他人に向かないところが良い。
- 地の句
この句の怖さは、
裏切る主体が「他人」ではないところだ。
誠実であろうとした瞬間に理想に届かない現実に気付く。
「魂よ」は祈りでもあり罵倒でもある。
この逆説が胸に刺さる。
- 天の句
月を見上げる前に、外見ではなく、生き方・姿勢・覚悟という
自分の立ち姿を確かめている。
しかし月は何も答えないし、逃げ場もない。凜とした姿が清々しい。

お題 「鼓動」

互選

1点

コーチの手がポンと背押すルーティン
恋心愛の告白待つ鼓動

訃の知らせ鼓動も早くなって冬

久し振りの恋の予感にハートドキドキ

来ない人にドキドキ10分の間

シャッター街ネコ三匹が大あくび

心音を悟られぬようチヨコレート

ドクターの検査結果待つ鼓動

明日帰省ラインは息子どんと晴れ

MAGAマガと鼓動高鳴るこの地上

合格通知開くドキドキ震える手

歳重ねられ打ちする心の臓

女医に脈年甲斐もなくドキドキし

修羅場終え鼓動抑える酒2合

午年の覇気を貰いに初詣

不整脈わたしの常がよこたわる

初恋にハートドキドキ踊る

心臓がまだ頑張ってくれている

さあ選挙右の鼓動が左向く

春の鼓動耳をすませば地中から

富士山の鼓動が伝う八合目

三枝なな

堀内きみ子

林ともこ

波部珀兎

信子

加山勝久

青空

堀内きみ子

松島きよみ

小西博稀

青空

松島きよみ

加山勝久

蔵内歳重

武智三成

小西博稀

井澤壽峰

春田敏晴

岩原一角

久世高鷺

浜知子

4点

大地の鼓動感じつつ朝散歩
画面から覇気を感じる安青錦

武智三成

山野寿之

5点

新しい命が鼓動呱呱の声
休眠打破いのちの芽吹く春の音
静けさの中で鼓動の音と居る
ときめきがあった時代を忘れない
新年だわたしの太鼓打ち鳴らす

林ともこ

春田敏晴

6点

胎児の心音ママへの応援歌
ケータイを切ったら残る鼓動だけ
ときめきを忘れた頃の不整脈
新刊の帯の鼓動に手が伸びる

秋山加代子

真鍋心平太

松谷由夏

山野寿之

7点

清張の鼓動聴こえる父の書庫
気付かないふりしてあげる恋の音
琴線に触れて心の撥鳴らす
地鳴りする地球が鼓動する如く

井澤壽峰

秋山加代子

平川柳

8点

透き通る風の鼓動は母の声
筆跡が鼓動のようなラブレター
やがて来る春の鼓動の匂う土

真鍋心平太

秋田あかり

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。

お題 「霜」 短句

互選

1点

霜踏みながら朝練に耐え
霜柱踏む曾根崎心中
ゴジラの子ども霜柱踏む
何年振りか霜降りの肉

霜柱午後にぬかるみ田舎道

昭和の子ども霜焼けの指

初霜を踏む三学期の児

霜柱踏む登校の子ら

リズムザクザク踏む霜柱

寒さ忘れた霜柱踏み

霜降り肉を大きく見せる

2点

子供もさわぎ嬉嬉と麦踏み

耳に霜やけ美容師が指摘

霜月ですがまだ扇風機

霜困いして労る牡丹

極寒の朝霜そそり立つ

霜柱踏む赤い長靴

庭の草踏み霜の声鳴る

霜が降る夜空キラキラ

霜焼けの指苛立つあの子

寒の入り来て霜柱立つ

3点

幾星霜経た思い出写真

キラキラの霜踏み学童児

ごめんねと言ひ霜柱ザク

霜柱踏みランドセル行く

久世高鷲

平川柳

平川柳

浜知子

加山勝久

松谷由夏

秋田あかり

浜知子

堀内きみ子

青空

春田敏晴

小西博稀

三枝なな

春田敏晴

山野寿之

井澤壽峰

松島きよみ

東尾由子

東尾由子

武智三成

井澤壽峰

波部珀兎

青空

三枝なな

松谷由夏

4点

霜やけの手を摩る母の手
10星霜を川柳の道

山野寿之

蔵内歳重

5点

落ち葉を包むうつすらの霜
霜の朝にも冬ばらは咲く
母の霜焼け父のあかぎれ
死ぬまで母で霜やけの手
霜柱踏む御百度のごと

秋田あかり

武智三成

松島きよみ

真鍋心平太

秋山加代子

6点

後悔はない霜柱踏む
霜柱踏みことばまるめる

直子

小西博稀

7点

霜踏みしめて行く始発駅
百のさすらい霜が見送る

久世高鷲

真鍋心平太

9点

霜が溶けそう恋も溶けそう
凍てついた霜旨い白菜

直子

林ともこ

12点

今月の投句者(26名 敬称略)

三枝なな 久世高鷲

信子 加山勝久

山野寿之 岩原一角

春田敏晴 東尾由子

林ともこ 武智三成

浜脇蓬生 直子

秋山加代子 真鍋心平太

太字は初参加の方です。

井澤壽峰 佐野正邦

堀内きみ子 小西博稀

平川柳 青空

松島きよみ 松谷由夏

波部珀兎 浜知子

秋田あかり 蔵内歳重

皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。

川柳天守閣 連載 評論「現代川柳の詩学」を考える ㊤

剣花坊の「民衆藝術」として大正川柳

十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平川柳(東京川柳会主宰)

老車夫の喘ぐ後に昼の月

剣花坊

一九一四(大正三)年の作。人力車は明治・

大正に普及した人力で人を運ぶ乗り物。それを曳ひくのが「車夫しゃふ」。東京で馬車を見た発明家の和泉

要助(一八二九・一九〇〇)、鈴木徳次郎(一八

二七・一八八二)と車職の高山幸助ら三人で、一

八六九(明治二)年に人力車を発明。一八七〇(明

治三)年三月二十二日、東京・日本橋で営業を開

始しました。樋口一葉(一八七二・一八九六)の

小説『たけくらべ』にも「車夫」の姿が描かれています。その姿は阪東妻三郎(一九〇一・一九五

三)主演の映画『無法松の一生』(一九四三年十

月公開)の主人公の「車夫」の姿です。

この句では人力車を曳く「老車夫」が「喘ぐあえ」姿が目に見えます。

一九一二(大正元年)年八月五日、日本で初めて「タクシー自動車株式会社」が設立され、東京・

銀座・数寄屋橋でタクシーは誕生しました。人力車の客はタクシーの普及につれて次第に減り、

「老車夫」には未来がありません。人力車を曳き「喘ぐ」「老車夫」の姿と亡びゆくものの心象風

景を表現した「昼の月」の取り合わせが絶妙です。これは「老車夫」を描いた剣花坊の「民衆藝術」としての「社会詠」の「新川柳」です。

この他、一九一三(大正二)年前後に剣花坊は

次のような「社会詠」の「新川柳」が発表されています。

子をみぞれ負ふた夕刊売りに霽降る 剣花坊

焼場道目の無い乞食生きてゐる

劍花坊

泥棒と夜逃と路次ろじですれ違ひ

劍花坊

子を捨てた晩の悶えは乳を抱き

劍花坊

「子」を背負いながら「夕刊」を売る新聞配達人、「目の見えない乞食」、「泥棒」、「夜逃」をする人、貧しさのため「子を捨てた」母親など社会の底で生きている人々の「内なる痛みや哀しみ」を劍花坊は「新川柳」で描いています。

一九一六（大正五）年前後にも次のような「社会詠」の「新川柳」が発表されています。

正月を楽しんで居て売られた娘

劍花坊

暁の淋しい赤い塗枕

劍花坊

大正時代には貧しい家庭のために遊郭や花街に「売られた娘」がたくさんいました。「赤い塗

枕」や赤い布団は遊郭の寝具として知られています。「暁の淋しい」という主観的な表現に身を売る女性たちの「内なる痛みや哀しみ」が表現されています。

妾宅の裏手へかゝる労働歌

劍花坊

一九二二（大正十一）年の作。この年の雑誌『改造』（新年号）で小説家の有島武郎は「宣言ひとつ」と題する次の一文を掲載しました。

「最近、日本に於て、最も注意せるべきものは、社会問題として、また解決としての運動が、いわゆる学者もしくは思想家の手を離れて、労働者そのものの手に移ろうとしつつることだ。」

有島武郎はこの一文で社会情勢の変化によって新たに勢力をもつようになってきた「無産階級」が台頭したことを認めています。

（続く）

「三周年」

真鍋心平太

おかげさまで当サイトもこの四月で三周年を迎える。三年という時間は、振り返れば短く、しかし確かに重みをもった歲月でもある。

天守閣サイトに集まった言葉たちが、いつのまにか人の息づかいを帯び、互いに呼応し合う場になっていった。そのことに、今さらながら開いて良かったと思う。投稿された一句一句の背後には、それぞれの生活があり、迷いがあり、各々の一日が確かに横たわっていると感じている。

さて、三周年を迎えるにあたり、ふたつの試みを考えている。

ひとつは、会員お一人ずつの句を束ねた「個人別記念句集」の作成である。誰かの代表作を競うのではなく、これまでその人が詠み、捨て、残してきた言葉と時間を、一冊のかたちに留めること。試作としてまとめつつある私自身の句集「びわ湖と逢坂」を眺めていると、句は作品である以前に、人生の断片なのだと実感出来る。推敲の跡も、行き止まりも、書き直しの痕も、自分が歩いてきた道そのものなのだ。

句集という完成形を想像しがちだが、ここで目指したいのは「途中経過としての句集」である。いまこの時点での自分を、そのまま棚に置く。その行為こそが、川柳を続けてきた証になるのではないかと思うからだ。

もうひとつは、平川柳さんをお願いして連載中の「現代川柳の詩学」を電子ブックとしてまとめる試みである。これは“答え”の本ではない。川柳とは何かを定義するための書でもない。平川柳さんが長いあいだ川柳について考え、迷い、立ち止まり、また歩いて来られた、その時間の記録だと思う。電子という器は、完成を急がず、思考の揺らぎや未整理の部分も、そのまま抱え込んでくれ、後日の修正、加筆も可能なので、新しい試みも入れた息の長いブックに出来れば良いと考えている。

川柳は完成形ではなく、生成の芸術である。詠んだ瞬間よりも、その後の時間のなかで、句は少しずつ姿を変えていく。三周年とは区切りではなく、流れの途中に立ち止まり、いまの景色を見渡すための節目なのかも知れない。

これからも、言葉と時間を重ねながら、無理をせず、急がず、皆様と手を携えて進んでいけたらと思っっている。

第34回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「アングル」 加山勝久 選
「氷柱」 波部珀兎 選
「秘密」 互 選
「雑詠」 真鍋心平太 選
「船」(短句) 互 選

(投句 各 2 句)

投句料 3 回につき 1000 円

(請求書メールが届いたらお支払い下さい。)

投句開始 2026年2月9日(月) から

投句締切 2026年月 15 日(日) まで

互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。

2月16日(月)～2月19日(木)

披講発表 2月20日(金) から随時閲覧可能になります。

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は
下記 URL から可能です。

<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。

会員登録は下記 URL より

https://tensyukaku.com/id_make.php

スマホは下記 QR コードから



投句・閲覧



会員登録

二〇二六年一月二五日発行

ウェブ川柳天守閣会報

(発行責任者 真鍋心平太)

(編集人 真鍋心平太)

(事務所)

〒 520-0054

滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

サンルシエル大津607号室

川柳天守閣

Tel・fax 077(532)4211

携帯 080(2672)4446

フォト川柳

クリックで拡大